

研究ノート

「アダム・スミスの価値尺度論」についての
海外における諸研究 (5)

——1950年代（その1）——

中 川 栄 治

序

わたくしは、主に今世紀に入ってから海外において発表されてきた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する諸研究を整理する試みの一環として、本誌第4巻第1、第2、第3、第4号において、それぞれ、19世紀末から1910年代、1920年代、1930年代、1940年代に発表された個々の研究の内容を整理する試みをなした。本稿はそのつづきであり、1950年代に海外において発表されかつわたくしがみることのできた「アダム・スミスの価値尺度論」に関する諸研究のうちの一部、J. F. ペル、J. A. シュムペーター、J. P. ヘンダースン、R. L. ミークの所論を整理しようとするものである*。

(1) J. F. ペル (1953)

まずペルによれば、スミスは、価値とは、効用（あるいは商品がもつ欲望充足力——ただし限界効用概念ではなくて総効用概念——）と「その対

* 諸研究の発表年度の区分は、本稿にさきだつ諸稿と同様、原則として、著書の場合には、その原版もしくは初版が出版された年度に、あるいはその最初の著作権が成立した年度に、そして、論文の場合には、それが最初に書物あるいは雑誌に掲載された年度に、したがった。ただし、本稿で使用了文献は、必ずしも原版、初版のものではない。

象物を所有することから生じる他の財貨にたいする購買力」という二つの異なる意味、換言すれば、「使用価値」すなわち主観価値と、「交換価値」すなわち客観価値という二つの異なる意味をもつとし、そのことを水とダイヤモンドの価値のパラドックスによって例証し、そしてそのうちの「交換価値」についての考察を行なうのであるが、そのさいスミスは、第一にこの交換価値の真の尺度あるいは諸商品の真実価格とは何であるか、つぎに真実価格の諸構成要素は何であるか、そして最後に諸価格がある一定の諸時点において他の諸時点におけるよりも高かったり低かったりするといったことをもたらす諸力とは何かということを解明することによって、諸商品の交換価値を規制する諸原理を考察したいと述べている、とされる。¹⁾

そしてベルによれば、スミスは、事物の購買力の真の尺度すなわちその事物の交換価値の真の尺度はその事物の貨幣での価格ではなく、その事物が購買者をして支配することを可能にさせるであろうところの労働の量であるとした、とされる。すなわち、ベルによれば、スミスは、売手の観点からすれば、その売手が売る品物は、彼がその品物と交換に受け取る等価物の労働購買力に応じて大きな価値をもつものであったり小さな価値をもつものであったりするものであり、また買手の観点からすれば、その買手が買う商品は、その商品が彼からはぶく労働あるいはその商品が購買する他人の労働次第で、大きな価値をもつものであったり小さな価値をもつものであったりするものであると考えた、とされる。そしてまたベルによれば、スミスはこのように労働を価値の尺度とするとともに労働をすべての価値の本来的な原因²⁾とし、労働のみがすべての商品の価値をあらゆる時と場所において比較し評価しうるところの究極のまた真の標準^{スタンダード}であり、労働が諸商品の真実価格であって貨幣はその名目価格にすぎないとするのであるが、さらにスミスは他方で、生産に費やされる時間の相違、熟練、辛さ、創意等々における相違が存在するかもしれないということから、二つの異なる労働量の割合を確定することは困難であるということを確認、それについてはいかなる正確な尺度も一般には適用されえず、交換の比率は「正

確ではなくても日常生活の業務を処理してゆくには十分なおおよその同等性を目安にして、市場のかけひきや交渉によって」(W.N., p. 31. 大河内訳<I>³⁾55ページ。)調整されるとしている、とされる。

1) John Fred Bell, *A History of Economic Thought* (New York: Ronald Press Co., c1953) —以下 Bell [1953] と略記する—, p.172.

2) このことを示すものとしてベルはつぎのようなスミスの文章をあげている。「労働こそは、すべての物にたいして支払われた最初の価格、本来の購買貨幣であった。世界のすべての富が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってである。そしてその富の価値は、この富を所有し、それをある新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである。」(Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, edited……by Edwin Cannan, with an Introduction by Max Lerner, The Modern Library <New York: Random House, c1937>—以下 W.N. と略記する—, pp. 30-31. 大河内一男監訳『国富論』<全3巻>, 中央公論社, 1976年,<I>—以下, 大河内訳<I>—と略記する。ただし、本稿で引用する引用文の訳は必ずしもこの大河内訳と一致しない。—53ページ。) Bell [1953], pp. 172-173.

3) Bell [1953], pp. 172-173. なお、ベルは、『国富論』第1篇第5章におけるスミスの価値分析について大旨以上のような説明をなしたのちそれにすぐつづいて、そのようなものとしてのスミスの議論に関して、「だが、この、労働のタームでの価値の説明は、『資本^{ストック}の蓄積と土地の占有にききだつ初期未開の社会状態のもとにおいて』適用できるのである、『労働量の割合が……これらの物〔諸対象物〕を相互に交換するためのルールを可能とする唯一の事情であると思われる』(W.N., p. 47. 大河内訳<I>³⁾80ページ。〔 〕内はベル。) のはそのような社会においてのみである。」と述べ (Bell [1953], p. 173. 傍点は中川。), 以下、資本の蓄積と土地の占有の行なわれる社会状態に適用できるものとして提示されたものとしての別のタームでの価値についてのスミスの説明として、賃金、利潤、地代という価格における三つの要因、自然価格およびその決定、市場価格とその決定、自然価格と市場価格の関係等々についてのスミスの議論をとりあげている。Bell [1953], pp. 173-174.

以上のように、ベルは、商品の交換価値を規制する諸原理の考察をスミスはまず商品の交換価値の真の尺度は何であるか、あるいは、商品の真実価格は何であるかという問題を解明することからはじめ、そのような問題にたいしてスミスは労働を価値の本来的原因とみなし、商品の真実価格は労働であり真の価値尺度は「支配される労働」であるとするいっぽうで、異質労働の問題のゆえにスミスは交換の比率

は「市場のかけひきや交渉」によって調整されるとした、とするのであるが、ベルは以上のようなものとしてのスミスの議論を、「労働のタームでの価値の説明」として一括してとらえ、そしてそのようなものとしての「労働のタームでの価値の説明」を、「労働量の割合が……これらの物〔諸対象物〕を相互に交換するためのルールを可能とする唯一の事情であると思われる」というスミスの考え方と事実上同一視するのであった。そしてまたベルは、スミスはそのような労働のタームでの価値の説明は「初期未開の社会状態」にのみ適用できるのだとして資本の蓄積と土地の占有の行なわれる社会状態については別のタームでの説明をしている、とみるのであった。ところで、スミスの議論についてのこのようなとらえ方によれば、真の価値尺度としての労働という考えと諸対象物を相互に交換するためのルールを可能とするものとしての労働量の割合という考えとが「労働のタームでの価値の説明」として同一視されることによって、スミスの議論におけるいわゆる「価値尺度の問題」は「価値決定あるいは価値規制の問題」と同一視されることになる、そしてまた、そのような意味での真の価値尺度としての労働の妥当性は「初期未開の社会状態」に限定されることとなる、ということもできよう。

(2) J. A. シュムペーター (1954)

他方シュムペーターによれば、スミスは『国富論』第1篇第4章で、分業—物々交換—貨幣という連鎖を完結し、つづいて「交換価値」と「使用価値」とを完全に切り離し、そして第5章では（カンティヨンの「富」の定義から出発して）貨幣のタームで表現されている価格よりもヨリ信頼の⁴⁾できる交換価値の尺度を発見することを企てる、とされるのであるが、シュムペーターは、このようなものとしての交換価値の尺度についてのスミスの議論に関連して、以下のような指摘をなしている。

①スミスは、交換価値を価格と等置し、また、「貨幣での価格」が純然たる貨幣的変動に応じて動揺することを観察して、地域間ならびに異時点間の比較という目的のために、それぞれの商品のこの貨幣的価格または「名目価格」に代えて、我々がたとえば貨幣賃金と区別した実質賃金について語るのと同じ意味での（たとえば『国富論』第1篇第5章第9パラグラフを見よ）^{リアル・プライス} 真実価格——すなわち、あらゆる他の諸商品のタームでの価格——をもち出してくる。⁵⁾

②そしてスミスは、彼の時代にすでに発明されていた指数方法をまったく知らなかったため、これらの真実価格をさらに転じて、(穀物がその役割を果たすか否かを考察したのちに)労働のタームで表現されている価格に置き代える。換言すれば、スミスは、——レオン・ワルラスによって一般的に用いられるようにされた言葉に従うならば——ニュメレールとして、商品たる銀や商品たる金の代りに、商品たる労働を選び出したのである。⁶⁾

③このことは有用であるかもしれないし有用でないかもしれない、しかし、このこと自体にはなんの論理的異論も存しはしない。⁷⁾

④ところが、スミスはこの考えを伝えるにさいしてはなほだしい悪あがきを示し、そのうえ、それを違った意味での価値や真実価格の性質に関する哲学と混同しているため——あらゆる物の真実価格としての「労苦と骨折り」(『国富論』第1篇第5章第2パラグラフ)や、「それ自身の価値がけっして変動することのない」唯一のもののたる労働(第7パラグラフ)等に関する有名な言説を見よ——、彼の基本的には簡単な考えがリカードウによってすら誤解され、よって、「価値規制」の事情を説明するものとしての一つの労働価値説——もしくはむしろ三つの相互に相容れない労働〔価値〕説——がスミスに帰されることとなった。⁸⁾

4) Joseph A. Schumpeter, *History of Economic Analysis*, edited from Manuscript by Elizabeth Boody Schumpeter (New York: Oxford University Press, c1954) ——以下 Schumpeter [1954] と略記する——, p. 188. 東畑精一訳『経済分析の歴史』(全7冊), 岩波書店, 1955年—1962年, 第1分冊, 391ページ。

5) Schumpeter [1954], p. 188, p. 188n. 19. 邦訳, 第1分冊, 391—392ページ, 393ページ注19。

6) Schumpeter [1954], p. 188. 邦訳, 第1分冊, 392ページ。

7) Schumpeter [1954], p. 188. 邦訳, 第1分冊, 392ページ。

8) Schumpeter [1954], p. 188. 邦訳, 第1分冊, 392ページ。なおシュムペター

はこのことに関してつぎのような説明をくわえている。それによれば、商品価値ないし価格を表現する単位として——労働はけっしてそれ自身の価値において変わらないという(妥当でない)論拠あるいはその他の論拠に基づいて——労働日ないし労働時間を選ぶことは、それ自体としては、なんら特別な交換価値ないし価格についての理論を意味するものではないのであり、それはあたかも商品価値ないし価格

を表現する単位として雄牛を選ぶことが、なんら交換価値ないし価格の雄牛説を意味しないのと同様である。ところがスミスはこの点をはっきりと認識していたようには思えないし、また彼は、若干の箇所では疑いもなく、彼が労働をニュメレールとして用いるということはまさにある一つの価値理論を意味するかのよう論じていた。そのため、④「ある商品が交換しうる労働の量」、⑤「この商品を生産するのに要する労働の量」、⑥「労苦と骨折り」というスミスの議論に存在する三つの考え（なお、シュムペーターによれば、スミスの議論においては、それらのうちの前のほうの二つのものは繰り返し混同されているように見受けられ、また、最後の「労苦と骨折り」は「あらゆるものの真実価格」とされるのであるが、それは、少なくとも後代における概念すなわち労働の不効用に等置されるものと解釈される限りでは、前のほうの二つのいずれの尺度とも一致するものではない、とされる。）が、スミスの懐いていた三つの労働価値説ないし労働価格説でもあると想像されることとなった。しかしながら、第一のものは、価値現象の説明としては論理的に役立ちえない——それは、そのようなものとしては、循環論法を意味する——ため、また、スミスは不効用のテーマを展開する努力をなさなかった故に我々は第三のものを無視することができるため、結局実際に我々に残されるものは第二のもののみということになる。ところがスミスは——リカードウやマルクスとちがって——、「商品の生産に要する労働の量」が価値あるいは価格を明白に「規制する」という命題を、労働以外には他のなんらの分配上の分け前をも考慮に入れる必要のない「初期未開の社会状態」に限定して、この第二の考え方については、そのような特殊な場合を除いてなんらの妥当性をも要求しなかったのであった。それゆえ我々は、スミスは労働という要因を強調したにもかかわらず彼の価値論はけっして労働説ではないのだ、という結論に到達するのである。Schumpeter [1954], pp. 188-189 n. 20. 邦訳、第1分冊、393—394ページ注20。

また、シュムペーターは、他の箇所において、「アダム・スミス（第1篇第5章）は、市場において一商品が支配しうる労働の量が、貨幣でのその商品価格のもっとも有用な代用物であると考えている、すなわち彼は労働をニュメレールとして選んでいるのである。原理的には、この決定にたいしてはなんの反対もありえない。」(Schumpeter [1954], p. 310. 邦訳、第2分冊、650ページ。)とし、そしてこのことに関連して、彼は、さきにみた説明と類似した説明をくわえている (Schumpeter [1954], pp. 310-311. 邦訳、第2分冊、650—652ページ。) そこにはつぎのような所説が含まれている。

①スミスがこのような決定をなしたとしても、そのこと自体は、彼が労働価値説を主張したということの意味しているわけではなく、それは、我々が雄牛をニュメレールに選ぶことが雄牛価値説を主張しているわけではないということと同様である。ところがスミスは、彼のその決定にたいしてさらに深い意味を要求するかのよ

うにみえる非常に多くの議論を費やして、その決定の論拠を求めている。たとえば、「労働だけが、……それ自身の価値がけっして変動することのないために、」あらゆる商品の価値の「究極で真の標準である」とか、「それは、すべての商品の真実価格である」あるいは「唯一の正確な価値尺度であることはもちろん、唯一の普遍的な価値尺度である」といったものである(W. N., pp. 33, 36. 大河内訳<I> 58ページ, 63ページ)。しかしこれらはいずれも誤ったものである。

②さらに、スミス自身が、あるものをニュメラルに選ぶことが意味することと意味しないことについてあまり明確でなかったように思えるため、後代の経済学者の多くがスミスの実際に意味していたことを誤解したり、彼ら——とくにリカードウ——が、スミスは一商品のなかに入り込む労働の量と一商品が購買しうる労働の量とを混同していたとして非難したりしたのは、ほとんど全くやむをえないところである。しかしながらこのような非難は失敗しており、また失敗しているということが重要な点である。というのは、この非難は理屈に合わないことでスミスを非難するに等しいからである。もともと商品の価値の説明として、それがなんであろうとその商品と交換されるものを用いるということは、〔価値〕理論の歴史における最悪のあやまちの一つであろう(さきでシュムペーターが循環論法だといったのはこのことを指していっているのであろう)。

③また、価格を表現する単位として1時間の労働とか1日の労働を選ぶことが、労働価値説の採択を意味するわけではないのと同様に、それはまた、生産における労働の役割の強調や労働の要求あるいは労働の不当待遇にたいする強調——たしかにこのような強調は『国富論』のなかに多く見られるのであるが——を意味するわけでもない。

(3) J. P. ヘンダースン (1954)

また、ヘンダースンは、つぎのような見方をしている。

①スミスは労働を交換価値の真の尺度としたのであるが、彼が効用よりも労働を尺度としたのは、彼はもともと微視的世界(microcosm)よりもむしろ巨視的世界(macrocsm)に関心をいだいていたからである。⁹⁾

②また、リアル・タームでの国民総生産の評価とは、穀物と貨幣のどちらが財貨の真実価値のヨリ良い尺度であるかということに関する彼の長い議論においてスミスが解決しようと試みたところの、指数問題(index problem) ¹⁰⁾なのであった。

9) ヘンダーソンは主旨以下のような考え方をしているといえる。それによれば、スミスは交換システムの分析において、経済にはたらく物的諸力によって決定される根本的かつ絶対的な価値を明らかにしようとしたのであり、そして彼は、市場の特定の事情のためになんらかの諸商品はそれらの真実価格以外の価格で交換されるかもしれないということ、しかしまた、市場価格からは独立的に、生産過程に由来する絶対的な価値が存在するということを、想定していた。物的に決定されたがってまた測定可能なそのような価値は、諸個人がそれらの諸商品に帰するかもしれない使用価値からは独立的でありつづけることであろう。以上のような考えをいざスミスは、交換価値を生産ということにかかわるものととも同義のものとしなした。この価値は生産過程において発生するのであり、労働がこの価値の源泉であり、リアル・タームでの国民総生産は生産的労働の物的成果なのである（なお、ヘンダーソンによれば、古典派は全体的にサービスの貢献を不生産的労働として無視する傾向があった、とされる。）。ところでスミスは、真実価値の尺度として、効用よりむしろ労働を使用した。これは、スミスが微視的世界よりも巨視的世界に関心をいだいていたからである。すなわち、スミスは、使用価値とは諸個人が諸商品に関してもつ意識 (ideas) や知覚 (perceptions)、およびそれらの諸商品から引き出されるべき見積られた満足といったものに依存するゆえに、使用価値は生産の諸条件からは独立的なものである、と考えた。ヒュームさらに彼にさきだつロックによって示されたものとしてのスミスの時代の一般的な哲学上の枠組みにおいては、意識や知覚といったものは、実在物質 (matter) が精神に反応を起こさせることの結果なのであったのであり、それらは個人的なものであったのであり、それゆえ、特定の個人に関してのみ意味のあるものであったのである。したがって、効用にまつわる諸観念は、それらからはいかなる一般的なあるいは抽象的な価値も仮説的に述べられえないところの、加算することのできない、従属的な、変数であったのである。そこでスミスは、経済的な因果関係の説明にさいして独立的で客観的な諸力を強調し富の源泉を生産における労働に帰するというロック、シャフツベリー、ハチスンさらにヒュームといった伝統にそいつつ、労働を真の尺度としたのである。John P. Henderson, "The Micro and Macro Aspects of the *Wealth of Nations*", *Southern Economic Journal*, Vol. 21 (No.1, July 1954) —— 以下 Henderson [1954] と略記する——, pp. 30-31, 33, p. 31n. 22. (スミスの議論における「生産的労働」と「不生産的労働」についてのヘンダーソンの見方については, Henderson [1954], p. 27 も見よ。また, 「使用価値」と「交換価値」については, Henderson [1954], pp. 28-30 も見よ。なお, ヘンダーソンのこの論文における, 『国富論』での全体としての経済システムについての分析と微視的な分析との関係についてのヘンダーソンの見方については, 拙稿『『国富論』における価値論の位置に関する諸見解——海外におけるアダム・スミスの価値論についての諸研究から

——』『広島経済大学経済研究論集』第1巻第3号, 1978年12月, 121—122ページも見よ。)

なお、以上のことからわかるように、ヘンダーソンは、スミスの議論におけるリアル・プライス リアル・バリュー「真実価格」, 「真実価値」という用語を、真実の交換価値を表わすものとしてみ、そして、その真実の交換価値が、うえてみた絶対的な価値に相当する、とみているようである。

- 10) Henderson [1954], p. 31 n. 22. つまりヘンダーソンは、穀物と貨幣のどちらが財貨の真実価値のヨリ良い尺度であるかということについてのスミスの議論も、巨視的な分析の一環をなすものであってそれはリアル・タームでの国民総生産の評価における指数問題にかかわるものである、とみているのである。

(4) R. L. ミーク (1956)

ミークは、前々稿でもふれたようにマルクスの『剰余価値学説史』によりつつ価値の「尺度」という言葉そのものが意味する事柄に言及しながら、E. キャンランが編集した『グラスゴー大学講義』における価値尺度についてのスミスの議論にも言及しているのであるが、¹¹⁾『国富論』における価値尺度についてのスミスの議論に関してつぎのような見方を示している。

①『国富論』での価値についてのスミスの議論は社会のなかでの分業についての彼の議論からはじまるのであるが、スミスは、「他財貨を購買する力」としての「交換価値」の真の尺度を確定したのちに、またそののちにのみ、その交換価値を規制または決定するものについての最終的な問題にすすむことができる、と考えた。¹²⁾

②分業によって特徴づけられる社会では商品の交換は本質上、社会的労働の交換である、ということが、スミスの出発点であった。それゆえ、商品の価値の「真の尺度」は、市場でその商品と交換されるであろうところの他の諸財貨に体化された労働の量であると、スミスが結論するだろうと思われてきたかもしれない。だが、実際に彼が結論したのは、商品の価値の「真の尺度」は、市場でその商品と交換されるであろう労働の量（現在の労働の量）である、ということであった。¹³⁾

③このようにスミスは商品の「真実価値」をその商品の売上げで雇いうる（現在の）労働の量への関連において測定しようとしたのであるが、これは、スミスがおそらく価値の問題をかなり発達した資本主義経済に特有の基本的経済諸過程への関連において考察することから始めそしてスミスは特に資本主義的蓄積過程の分析に関心をもっていた、ということに拠るところが大きい。¹⁴⁾

④価値の「真の尺度」としての支配労働というスミスの概念は、その起源においては、資本主義のもとでの蓄積という特殊な問題についての分析へのスミスの関心の産物であるという点がかかなり多かったようなのであるが、『国富論』においては、この概念は、社会的分業が「くまなく行なわれている」あらゆる種類の社会に適用しうることを意図された一般的な形で表現されているのであり、そしてたまたもしも「真の尺度」についての彼の議論は本質的にはこの基礎概念をこのようにして一般化するという試みからなっているのだということが察知されないならば、スミスの価値論は正しく理解されえないのである。¹⁵⁾

⑤この一般化の過程には、二つの主要な段階がある。第一にスミスは、経済組織のあらゆる特殊の形態を捨象することによって、分業によって特徴づけられるあらゆる社会においては（資本主義社会においてだけでなく）商品がその所有者にたいしてもつ「真の値うち」または「真実価値」は、彼がその商品によって支配しうる他の人々の労働の量に依存するのだということを、示そうとする。¹⁶⁾ 第二にスミスは、商品の原価と商品の「真の値うち」または「真実価値」との間の基本的な区別を一般的な言葉で組み立てて、それが（資本主義社会だけでなく）どんな社会で生産された商品にもあてはまるようにしようとする。¹⁷⁾¹⁸⁾

⑥スミスはそれからさらにすすんで、彼の尺度は、貨幣のペールを貫いて交換の外的現象の奥に横たわる一定の基本的社会関係にまで到達するという意味で、実際に、真の価値尺度なのだ、と主張する。¹⁹⁾

⑦最後に、スミスは、「それ自身の価値がたえず変動するような商品は、

他の諸商品の価値の正確な尺度とはけっしてなりえない」ということから、「労働」が不変性という性質をもつということを示そうとつとめる。そしてこのことを示すために、彼は、ある所与の労働量にたいして労働者にそのときどきに支払われる財貨の量がたまたま変わるとしても、実際に変わるのはこれらの財貨の価値であってその労働の価値ではない、と主張しなければならなかった。²⁰⁾

⑧他方、労働時間が相対的「価値」の指標^{ガイド}として正しく用いられうるようになるためには労働のさまざまな種類あるいは等級に適当な比重が与えられなければならないという考えは、『国富論』よりもはるかに古いものであった。²¹⁾そしてまた、利潤生活者と賃金生活者との基本的区別が樹立されたのちは、賃金生活者という階級のなかでの「身分」の違いは、たんに熟練の差を反映するかぎりのものを除いて、価格の決定の問題には多かれ少なかれ無関係なものとなり、以前には生産に関係する人々の広汎な階級のなかに存在したそのほかの「身分」的差異の大部分は、いわば、資本家階級と賃労働者階級との基本的な社会的区別のなかに解消されるにいたった。そこで、おおざっぱに言えば、ひとたび労働力が商品となりそしてそれがかなり競争的な条件のもとで売られるようになると、価値の問題に関連して本当に考慮に入れられるべき労働の質[・]的[・]な[・]差[・]異[・]はただ、熟練と強度の差にもとづくものだけ、ということになるのであった。²²⁾

⑨だが、熟練度や強度の異なる労働が入り込んでいる場合にさまざまな商品の相対価値を労働のタームで評価するという問題は、依然としてたいへん困難な問題である。スミスはまずこの問題を、価値尺度についての章（『国富論』第1篇第5章）のはじめに近いところで論じ、またふたたび、つぎの章で、「初期末開の社会の状態」のもとにおける価値の決定についての議論の途中で、この問題に立ち戻った。²⁴⁾

⑩なお、それらの箇所におけるスミスの表現は、たしかにいくつかの点ですこし不十分である。しかし全体としての彼の議論は、実際には、しばしば言われるような循環論だという非難²⁵⁾に値するとは思われない。すなわ

ち、スミスは、熟練労働の不熟練労働へあるいは強度のまさった労働の強度の劣った労働への理論的な還元が、市場において当該の労働者たちが実際に受け取る報酬を考慮して、行なわれるべきだ、ということを示唆しているのではないのである。彼が言っているのはただ、(a)理論上は、調整が行なわれなければならない、ということ、(b)実際には、調整は「ある正確な尺度によってではなく、市場のかけひきによって」なされるのだ、ということなのである。²⁶⁾

＜補 記＞

なお、ミークは、『国富論』における「真の価値尺度」に関するスミスの議論を以上のようなものとしてとらえるのであるが、本稿注13でふれたように、ミークによれば、スミスが以上でみたように「支配しうる労働」を価値の「真の尺度」としたことが、スミスの価値論に関連する諸困難のうちのたいていのものの起源となった、とされるのであった。その間の事情についてのミークの説明はつぎのようなものである。

商品の価値の「真の尺度」を確定したのちにまたそののちのみその商品の価値を規制または決定するものについての最終的な問題へとすすむことができる考えたスミスは、価値の「真の尺度」として支配労働を選んだのち、彼が価値の「規制」(“regulation”)とよんだものについての問題へと向かった。つまり、商品の「真実価値」はその商品が支配するであろう労働の量によって測定されるのであるが、ではこの「真実価値」はどのように規制されるのか、換言すれば、その商品が、それより多くもなく少なくもなくまさにそれだけの量の労働を支配することを決定するのは何か、という問題に向かったのであった。『国富論』での価値についてのスミス議論は、社会のなかでの分業についての彼の議論からはじまり、さらに価値尺度の問題→価値規制の問題という形で展開されたのである。ところで、このような形で展開されたスミスの価値論そのものは、一つの「費用説」として分類されるべきものであった。²⁷⁾しかしながら、スミスが価値

の「真の尺度」として支配しうる労働を選んだがゆえに、彼の価値論はつぎのような性格、欠陥をもつこととなった。²⁸⁾

④第一に、スミスの「真の尺度」は、価値論のなかへ不必要な二分法(dichotomy)の導入を、もたらした。一方の方法は産出を評価するのに用いられ、他方の方法が、投入を評価するのに用いられることとなった。つまり、産出の価値は、それが購買または支配するであろう労働の量によって評価されるのにたいし、投入の価値は、結局、その産出を生産するのに要した労働の量で評価されるのであった。そして、可能な蓄積の適切な尺度とスミスがみなしたのは、これら二つの労働量のあいだの差なのであった。しかしながら、実際には、生産過程における価値差額の出現がおのずから明らかになるのを許すようなやり方で投入と産出とを「労働」に還元するもう一つのそしてもっと満足のいく方法が存在するのであり、そしてこの別の方法すなわちマルクスの方法（そして、ある程度はリカードウの方法）とは、産出を、それを生産するのに要した全労働量で評価し、そして投入を、その産出を生産するのに用いられた資本財と原材料と人間エネルギーとの生産に要した労働量で評価する、といったものである。²⁹⁾

⑤第二に、スミスの理論は、我々につぎのように言うことを求める。すなわち、労働の価値はとにかく不変であって、したがって、ある商品が支配するであろう労働量の変化は、つねに、その商品の価値における変化を示すものと解しうるものであり、たとえその商品の生産条件にはまったく何事も起こらずただ現行賃金率が変化しただけだとしてもそうなのである、ということである。しかしながら、リカードウのいうように、労働の価値は「他のすべての物と同じく、社会状態のあらゆる変化とともに一樣に変動する供給と需要との割合によって影響されるばかりでなく、また労働の賃金が支出される食物やその他の必需品の価格の変動によっても影響されるのであるから」³⁰⁾、それは、事実、変化するのである。³¹⁾

⑥第三に、そして第二の点に関連して、スミスの理論は、我々につぎのうに言うことを求める。すなわち生産物の価値は、その生産の諸条件の

変化にかかわりなく、その生産物が一方で賃金に他方で利潤および地代に分けられるその分割の変化とともに、変化するのだ、ということである。いま、労働が賃労働となる以前の、スミスのいう「初期未開の社会の状態」において、ある特定の商品を生産するのに10時間の労働がかかる、としよう。その場合には、その商品が購買または支配するであろう労働の量もまた10時間であろう。ところが、いま、資本が蓄積され土地が私有されているとし、しかも、その商品を生産するには依然として10時間の労働を要するとしよう。その場合には、労働の産物の分け前をもらう権利をもつようになったあらたな諸階級に、利潤と地代が支払われなければならないという事実のために、その商品が購買または支配するであろう労働の量は、いまや、10時間よりも多いであろう。それゆえ、その商品の生産の技術的諸条件は同一のままであるとしても、スミスの意味でのその商品の価値は、増大したのだと言われなければならないのである。これにたいし、リカードはつぎのように主張したのであった。すなわち、スミスがそう言う傾向があったように、「利潤と地代とが支払われなければならないれば、これらのものが、諸商品の生産に必要な単なる労働量とは無関係に、それらの商品の相対価値にいくらかの影響をおよぼすかのように」³²⁾言うのは、まったく間違いである、と。³³⁾

- 11) ミークによれば、我々が価値の「尺度」について語るときには、それはつぎの二つのことのいずれをも（あるいは多分その両方を）意味しうるのであり、その一つは、一フット物差しが長さの尺度であり、ぜんまい秤が重さの尺度であるのと同じ意味での「尺度」、もう一つは、価値のまさに内容あるいは実体を測定するだけでなくある意味でその内容または実体を体現するところの、一種の内在的「尺度」を意味するものとしての「価値尺度」、ということである、とされる。Ronald L. Meek, *Studies in the Labour Theory of Value*, 2nd ed. (London: Lawrence & Wishart, 1973; 1st ed., 1956) —以下 Meek [1956] と略記する—, p. 51. 水田 洋, 宮本義男訳『労働価値論史研究』〈初版の訳〉, 日本評論新社, 1957年, 53—54ページ。

また、『グラスゴー大学講義』での価値尺度についてのスミスの議論へのミークの言及はつぎのようなものである。すなわち、『講義』の「価値の尺度としての賃

幣」を取り扱っている節ではスミスは貨幣をうえにみた二つの意味のうちの最初の意味の尺度として考察した。だが、それにつづく節のはじめではスミスは、「我々は、貨幣を価値の尺度たらしめたのは何であるかを示した。しかし注意すべきは、貨幣ではなくて労働が、価値のほんとうの尺度だということである。」〔Adam Smith, *Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms: Delivered in the University of Glasgow by Adam Smith, Reported by a Student in 1763*, edited with an introduction and notes by Edwin Cannan (Oxford: Clarendon Press, 1896; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley, Bookseller, 1964), p. 190. 高島善哉, 水田 洋訳『アダム・スミス グラスゴー大学講義』, 日本評論社, 1947年, 364ページ。〕と述べている。このことにたいして、ここではスミスは「尺度」という言葉を第二の意味で使っているのだということ, そして『国富論』の「労働〔価値〕説」の萌芽がこの言葉のなかに見出されるということが、ときどき言われてきた。この提案のなかに真理の一要素があるということは可能である, だが、スミスが『講義』を行なったときに価値の「真の尺度」としての労働というこの考え——それは、18世紀の著作家たちの著作のなかできわめてしばしば出合う考えである——を、富裕は貨幣に存するという重商主義的見解に対して用いるべき都合な武器といった程度のもをはるかにこえる何物かであるとみなしたのだということを示す実際の証拠は、なにも存在しはしない。(なお、ミークによれば、いままで重商主義的見解に対する批判という目的のためにこの考えが使用されえたという事実が、18世紀においてこの考えがますます普及したことの理由の一つ、ただし副次的な理由、である、とされる。)『講義』においてスミスは、彼が結局のところ商品の価値の貨幣的表現とみなすこととなったところの商品の「自然価格」の輪郭を描くために、長い間かかった。だがこの段階ではまだスミスは、究極的に「自然価格」を決定する深層の諸力に達するために市場の外的現象という表面の下の十分に深いところまで入り込んでいたわけではなかったのである。Meek [1956], pp. 50-51, p. 51 n. 4. 邦訳, 53—54ページ, 55ページ注4。

- 12) ミークは主旨つぎのような説明をしている。それによれば、スミスは『国富論』第1篇第1章から第3章で分業の問題を取り扱っているのであるが、第2章および第3章ではマニュファクチャー内分業と社会的分業のうちほとんどもっぱら社会的分業を問題にしている。そしてこの分析のなかから価値についての彼の議論がはじまるのである。すなわち(社会的)分業の行なわれる文明社会では、各労働者は、他のすべての労働者のために働き、また、彼らに依存する。こういう事情のもとでは、労働が投下されて生産された有用な物体を所有することは、慣習的に、その所有者に、「他の財貨を購買する力」をもたらす、言い換えれば、その物体は交換価値を得る、というのである。スミスの議論が意味するのは、その物体が、個々人の別々の労働の生産物の相互交換によって特徴づけられかつそれに依存するところの

社会における、個人のまたは諸個人の集団の労働の生産物であつたという事実のために、その物体が、この交換価値を得るのだ、ということである。商品の交換は、本質上、社会的活動の交換であり、交換の行為のなかにあらわれる諸商品の価値関係は、本質上、生産者としての人間と人間との関係の反映なのであり、価値は、のちにマルクスが述べることとなったように、一つの社会的関係なのであるが、スミスも、価値とは商品が社会的労働の生産物であるという事実によってその商品に与えられるところの属性であると考える傾向を、実際にもっていた。そしてまさにこの意味において、またこの意味においてのみ、スミスは労働を、価値の「源泉」または「原因」とみなしたのであった。ところで、もし我々が、商品は、それが社会的労働の生産物であるために価値をもつのだと言うにとどまるならば、我々は、その商品が交換において他の諸商品をひきよせる力の源泉を定義したにすぎないのであって、その商品がもつこの力の程度がどのようにして規制されるかあるいは決定されるかを、まだ説明していないのである。（ミークによれば、価値原理とは、一商品が「他の諸財貨を購買する力」をもつのはなぜかということを説明しうるだけでなく、それが実際にもっているまさにそれだけのこの力を、なぜもっているのかということの説明しうるものでなければならず、この意味で、価値原理とは、性格上、量的であるべきである、とされる。）ところで、もし我々が、商品の生産に用いられた労働をその商品の価値の源泉としてだけでなくその商品の価値のまさに実体を構成するものともみなし、またその結果、その商品が、「凝結し」または「結晶した」牽引力のある種の集合体ともいふべきものとみられるならば、我々は、はるかに解決に近づくこととなる。すなわちその場合には、商品が価値を得るのは、その商品が社会的労働の生産物であるからだけでなく、そうである程度においてでもある、と結論していいであろう。我々は、その商品の牽引力の程度はその商品の生産に使用された社会的労働の量と直接に結びついて変化する、と言ってもよいであろう。換言すれば、その商品の牽引力の決定者を、その商品自体の生産の諸条件よりも速く求めることなしに、見出しうるのである。しかしながら、スミスは、普通の場合には、この問題を、まったくこのように見たわけではなかった。確かに彼は、商品の生産に社会的労働が投下されたためにその商品が価値をもつにいたつたのだと信じていた、だが、彼は、この労働を、その商品の価値の実体をなすものとはみなさなかつたのである。スミスの考察の仕方によれば、商品が価値を得るのは、その商品が社会的労働の生産物であるからなのであるが、しかしながら必ずしもそうである程度においてではなかった。その商品の価値の程度がどのようにして規制されるかを見出すためには人はまずその商品の価値が本来どのようにして測られるべきかを見出さなければならない、とスミスは信じたのである。そして、スミスの意見では、その商品の価値の尺度は、その商品の生産の諸条件への注目によっては、確かめられえないのであった。価値の尺度は、その商品の生産の諸条件のな

かにではなく、むしろ、その商品の交換の諸条件のなかに、求められるべきであるとされるのであった。それはちょうど、我々が磁石の牽引力を、それが受けた磁化の量を調べることによってではなく、それが実際に引き付けうることがわかった物体の重量を測ることによって、測定しようとするのと同じである。スミスは、商品の交換価値の「真の尺度」は、その商品が正常な場合に市場で示すところの、実際に「他の財貨を買う力」を考慮することによって、確かめられるにちがいない、としたのである。そして、このようにしてその商品の価値の「真の尺度」を確定したのちに、またそののちにのみ、人は、その商品の価値を規制または決定するものについての最終的な問題へとすすむことができるのであったのである。Meek [1956], pp. 60-63. 邦訳, 66—71ページ。

- 13) Meek [1956], pp. 63-64. 邦訳, 71—72ページ。スミスのこの決定に関連してミークはつぎのような所説を示している。それによれば、ここでの中心的な問題はつぎのことである。すなわち、あなたがある商品を市場で売ってその売上げを他のなにかを買うのに使用する場合、あなたはつねに、実際には、労働と労働を交換しているのである、したがって、あなたの商品があなたにとって有する「真の値うち」または「真実価値」^{リアル・バリュー}はその商品がそのような交換においてあなたをして支配できるようにさせることのできる「労働」の量によって測定されるのだ、と、もっともらしく言うことができる。だが、あなたの商品を売るその売上げであなたが買う「他のなにか」は、ある一定量の労働の現在の用役であるかもしれない、また、過去においてある一定量の労働が投下されたところの他の商品であるかもしれない。そして、これら二つの労働量は、スミスがよく知っていたように、必ずしもつねに同一であるわけではなく、事実、両者が同一であるのは自己の生産手段をもつ独立小生産者の生産にもとづく社会においてのみであろう。では、もしあなたが、あなたの商品の「真実価値」——すなわち、その商品があなたをして支配できるようにさせることのできる「労働」の量——を測定しようとするならば、あなたはそれを、その商品の売上げで雇いうる現在の労働の量への関連において測定しようとするのか、それとも、あなたがその売上げで買いうる他の商品のなかに体化されている過去の労働の量への関連において測定しようとするのか。もしあなたが、スミスがそうしように諸商品の交換は本質上、人々がそれらの商品のなかに体化した異なる労働の交換であるという考えから価値の分析を始めるならば、あなたの選択は論理的に、前に述べた二つのうち後者に向かうように思われる。しかしスミスは、第一のものを採用したのであった。Meek [1956], p. 64 n. 1. 邦訳, 71—72ページ注1。

また、ミークによれば、スミスが価値の「真の尺度」を支配しうる諸商品に体化された労働よりもむしろ支配しうる労働としたというこの決定のなかに、スミスの価値論に関連する諸困難のうちのたいていのものが、その起源をもっていた、とされる。Meek [1956], p. 64. 邦訳, 71ページ。

なお、ミークによれば、多くの注釈者がやってきたようにスミスが「支配労働」尺度を体化労働という価値の規制者の代用品たらしめようとしたのだと言うのは正しくなく、スミスが言ったことはただ、「資本の蓄積と土地の占有にさきだつ初期未開の社会状態」という昔には体化された労働が支配しうる労働の量を(したがって価値を)規制したということ、そして、資本の蓄積と土地の占有の行なわれる現代では自然価格の構成要素が、支配しうる労働の量を規制する、ということ、だけであり、明らかに、「支配労働」尺度は、昔にも今にも適用しうるものであるということを、意図されていた、とされる。Meek [1956], pp. 71-72 n. 4. 邦訳, 81ページ注4。(なお、すでにみたように、ミークによれば、スミスは、商品のこの「自然価格」をその商品の「交換」価値の貨幣的表現とみなした、とされる。Meek [1956], p. 51. 邦訳, 54ページ。本稿注11。)

- 14) ミークによれば、価値の「真の尺度」としての支配労働という考えそのものは、そのような考えが生まれた社会すなわち労働力が商品となった資本主義社会のきわめてはっきりしたしるしを身につけている、すなわち、そのような社会においてのみ人々は商品の「真の値うち」をその商品の、労働自体を購買する力(その商品の、労働の生産物を購買する力と区別された)と結びつける可能性があるのである、とされるのであるが(Meek [1956], p. 65. 邦訳, 72-73ページ。), ミークは、スミスの議論における、「真の尺度」としての支配労働と資本主義的蓄積過程の分析に関してつぎのような説明を示している。それによれば、スミスは、資本主義的蓄積過程は、生産の継続的な諸期間における資本家による「生産的」賃労働の雇用という観点から考えるときにのみ正しく理解されうる、と信じていた。すなわち、最初の期間に、資本家が、需要があるらしいと彼が信じた商品を生産するためにある一定数の労働者を雇い、そしてこれらの商品がとにかく生産されて、市場に出され、そしてそれらが売られる価格は、通常、賃金費や原材料費等々を償うだけでなく「自然」率での利潤と地代を提供するに十分であった、とする。このように、この「自然」価格の実現過程においてなんの支障もおこらなかったと仮定し、さらにまた、賃金率にとるにたりるほどの増加がなかったと仮定すると、資本家にとっては、つぎの生産期間において、すぐ前の期間よりも多くの数の「生産的」労働者の用役を支配することが可能になる。彼の労働力へのこの可能的な追加の程度が、彼(および彼の地主)が新しい期間において行ないうる蓄積の尺度とみなされえた。そして、各々の個々の資本家の場合に本当であったことは、全体としての国民にとっても、本当であるのであった。ところで、スミスにとっては、この過程の正しい分析のためにはつぎのような価値原理すなわち当該のさまざまな物質的諸生産物を一つの共通要素に還元しそうしてまた投入と産出との間の継続的な差に量的な意味を与えることを可能にする価値原理、の利用が必要であるということは、明らかであったにちがいない。また、こういうやり方で蓄積過程を考察しそし

すでに前でもたやり方で価値の一般問題を考察した人にとっては、価値の「真の尺度」たりうるものは、ほとんど直ちに現われたにちがいない。すなわち、商品の生産を、自分みずからそれらの商品を消費したいとかそれらの商品を生活資料と交換したいとかいうためではなく利潤を得つつそれらの商品を売りそして資本を蓄積したいがために、組織する資本家的雇用者、このような資本家的雇用者の観点からすれば、これらの商品の「真実価値」のもっとも適当な尺度は、それらの商品の販売からあげられる売上げによって彼がつぎの生産期間に支配することのできる賃労働の量であると思われるのも、もっともなことであろう。それらの商品が支配する賃労働の量が大きければ大きいほど、彼の労働力に対して彼が追加しうるものも大きく、したがってまた、蓄積されうる額も大きいであろう。それゆえ、もし我々が「労働」という言葉で、諸商品の売上げが市場で雇うであろう賃労働の量を意味するものとするれば、資本家にとっては、「労働」がその諸商品の価値の「真の尺度」であると思われるのも、もっともなことなのである。（なお、ミークによれば、商品のうちで他の商品と交換されるよりも実際に労働と交換される部分が増大するにつれて——すなわち、おおざっぱに言えば、独立生産者による商品生産が資本主義的商品生産に取って代わられそして労働力がますます商品に転化されるにつれて——このような概念のもっともらしさははっきりと増大したのである、とされる。他方またミークはつぎのことも指摘している。すなわち、いま述べたことは、スミスがこの概念を彼の「真の尺度」の基礎として使用したという点で正しかったのだということを行っているのではなく、事実、その概念の彼の使い方は、マルクスがリカードウについてなしたのと同じ種類の批判つまり「彼が、ただ『価値』だけを説明すべきところで、したがってただ『商品』だけを取り扱うべきところで、……発展した資本主義的生産関係から生ずるいっさいの諸前提をいきなり取り込んでいる」<K. マルクス著、大内兵衛、細川嘉六監訳『剰余価値学説史』マルクス＝エンゲルス全集第26巻第2分冊、大月書店、1970年、第13刷1978年、269ページ。>という批判と同種類の批判を受けるのが正当である、ということである。）このような価値尺度の助けによって、投入と産出の間の量的な価値の差——資本主義的生産過程において生じた剰余すなわち「純収入」の尺度とみなされてもっともな差——が明らかにされるようなやり方で投入と産出の双方を共通の要素（「労働」）に還元することが可能だ、とスミスは信じたのである。一国の生産物が購買したりあるいは支配したりするであろう労働の量（すなわちその生産物の価値）は、一般に、それを生産するの_{コスト}に要した労働の量よりも（すなわちその生産物の原価よりも）大きいのであり、そしてこれら二つの労働量の間の差が、その社会がつぎの生産期間に行ないうる蓄積額の尺度なのであったのである。Meek [1956], pp. 65-66, p.66n. 2. 邦訳、73-75ページ、74ページ注2。

15) Meek [1956], pp. 66-67. 邦訳、75ページ。なお、ミークによれば、スミス

が求めていたものは、あらゆる種類の社会におけるあらゆる商品交換に適用できるような価値の「真の尺度」についての抽象的な一般論であったのであり、また、スミスが輪郭を描いたような高度に発展し分化した社会は、マルクスが述べたように、その社会自体の生産の諸条件の表現として役立つだけでなく同時に過去のあらゆる形態の社会で支配的であった組織と生産諸条件についての洞察を得ることを可能にするような抽象的な諸範疇を生み出す能力を特にもつのであったのであるが、他面おなじくマルクスが強調したように、最も抽象的な範疇でさえ、それらはあらゆる時代に適用しうるにもかかわらず、まさにその抽象という限界のゆえに、歴史的諸条件の産物でもあるのであって、それらの歴史的諸条件に対してのみまたそれらの条件のもとでのみ、十分に適用されうるものであり、そして、若干の抽象概念は、表面上はすべての時代に安全に適用しうるようにみえながらも実際にはそれらを生み出した特定の社会に固有な産物であるため、それを以前の諸社会構成に適用しようといういかなる企ても誤謬と混乱におちいらざるをえないのであって、労働力が商品となった資本主義社会というそれが生まれた社会のきわめてはっきりとしたしるしを身につけている価値の「真の尺度」としての支配労働という考えも、その一つの例である、とされる。Meek [1956], pp. 64-65. 邦訳、72—73ページ。

- 16) Meek [1956], p. 67. 邦訳、75ページ。スミスがこのことをなしているものとしてミークは『国富論』のつぎのような文章を引用している。「人が富んだり貧しかったりするのは、人間生活の必需品、便益品および娯楽品をどの程度享受できるかによる。だが、分業がひとたび徹底的に行き渡るようになったあとは、一人の人間が自分の労働で充足できるのは、このうちのごく小さい部分にすぎない。彼は、その圧倒的大部分を他の人々の労働に仰がなければならない。つまり彼は、自分が支配できる労働の量、または自分の購買できる労働の量に応じて、富んだり貧しかったりするにちがいない。したがって、およそ商品の価値は、それを所有していても自分では使用または消費しようとはせず他の商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品で彼が購買または支配できる労働の量に等しい。それゆえ、労働はすべての商品の交換価値の真の尺度である。」(W. N., p. 30. 大河内訳< I > 52ページ。) Meek [1956], p. 67. 邦訳、75—76ページ。

- 17) 本稿注14を見よ。

- 18) Meek [1956], p. 67. 邦訳、76ページ。スミスがこのことをなしているものとしてミークは、本稿注16でみた『国富論』の文章の直後につづくパラグラフに含まれるつぎの文章を引用している。「あらゆる物の真実価格、すなわち、どんな物でも人がそれを獲得しようとするにあたって本当に費やすものは、それを獲得するための労苦と骨折りである。あらゆる物が、それを獲得してしまった人にとって、またそれを売りさばいたり他のなにかと交換したりしようと思ふ人にとって、真にどれほどの値うちがあるかといえ、それによって彼自身がはぶくことのできる労

苦と骨折りであり、換言すれば、それによって他の人々に課することができる労苦と骨折りである。』(W. N., p. 30. 大河内訳< I >52—53ページ。傍点の付されている箇所は、ミークがイタリック体になっている箇所。) Meek [1956], p. 67. 邦訳, 76ページ。

なお、上の引用文における、「それによって彼自身がはぶくことのできる」労働の量と「それによって他の人々に課することのできる」労働の量とのスミスの同一視の背後にある想定についてのミークによる説明については、R. L. Meek [1956], pp. 67-68 n. 2, 邦訳, 76ページ注2, 拙稿『「アダム・スミスの価値尺度論」についての海外における諸研究(2)——1920年代——』『広島経済大学経済研究論集』第4巻第2号, 1981年7月, 98ページ注12を, 見よ。

- 19) Meek [1956], p. 68. 邦訳, 76ページ。スミスがこのような主張をなしているものとしてミークは、本稿注18でみた『国富論』の文章につづく文章をあげている。「貨幣または財貨で買われる物は、我々が自分の肉体の労苦によって獲得するものと全く同じように、労働によって購買されるのである。その貨幣、またはそれらの財貨は、事実、この労苦を我々からはぶいてくれる。それらはある一定量の労働の価値を含んでおり、その一定量の労働の価値を我々は、その場合、それと等しい労働量の価値を含んでいるとみなされるものと交換するのである。労働こそは、すべての物に対して支払われた最初の価格、本来の購買貨幣であった。世界のすべての富が最初に購買されたのは、金や銀によってではなく、労働によってである。そしてその富の価値は、この富を所有し、それをある新しい生産物と交換しようと思う人たちにとっては、そうした人たちがそれで購買または支配できる労働の量に正確に等しいのである。』(W. N., pp. 30-31. 大河内訳< I >53ページ。) Meek [1956], p. 68. 邦訳, 77ページ。

- 20) Meek [1956], p. 68. 邦訳, 77ページ。スミスがこのような主張をなしていることを示すものとしてミークは、『国富論』のつぎの文章をあげている。「等量の労働は、時と場所のいかんを問わず、労働者にとっては等しい価値である、ということができよう。健康、体力、精神が普通の状態で、また熟練と技能が通常の程度であれば、彼はつねに、自分の安楽、自由、幸福の同一量を犠牲にしなければならない。彼が支払う価格は、それと引換えに彼が受け取る財貨の量がどうであろうと、つねに同一であるにちがいない。なるほど、その労働が購買するのは、これらの財貨のうちより大きい分量のこともあれば、より小さい分量のこともあろう。だが、変動するのは、それらの財貨の価値であって、それらを購買する労働の価値ではないのである。……それゆえ労働だけが、それ自身の価値がけって変動することのないために、すべての商品の価値を、時と場所のいかんを問わず、評価し比較することのできる究極で真の標準である。労働はすべての商品の真実価格であり、貨幣はその名目価格であるにすぎない。』(W. N., p. 33. 大河内訳< I >57—58ペ

ージ。) Meek [1956], p. 68. 邦訳, 77ページ。

- 21) ミークはその例として、教会法学者の体系における「公正価格」の決定をあげ、そして、それらの体系においては直接生産者の社会的身分や彼の熟練さらに彼の労働の強度が彼の生産物の「公正価格」の決定にあたって重要な役割を演じるものとししばしば主張された、としている。また、ミークによれば、社会的身分の問題は資本主義の発展につれてしだいに重要性を減じていったのであるが、18世紀においてさえスミスの先駆者のうちのある人々は依然として商品の価格はしばしばその直接の生産者の身分によってある程度は変わるものだということを示唆しているのが見出される、とされる。その例としてミークは、商品の価値についてのハチスンのつぎの文章をあげている。「その価値はまた、我々に財貨あるいは技術的な仕事を提供する人々がその国の習慣に従って置かれるべき地位の高さによって、上昇する。そのような地位において維持されうる人々は、卑しい地位におけるよりも少ないし、そして、彼らの地位の高さと費用は、彼らの財貨や労働^{サービス}のより高い価格によって、維持されなければならない。」(Francis Hutcheson, *A System of Moral Philosophy* <1755>, Vol. II, p. 55.) Meek [1956], pp. 74-75. 邦訳, 85ページ。

- 22) Meek [1956], pp. 74-75. 邦訳, 85—86ページ。

- 23) ミークは、スミスが第5章においてこの問題を論じている箇所としてつぎの文章をあげている。「二種の異なった労働の量のあいだの割合を確かめるのは困難な場合が多い。二つの異なった種類の作業に費やされた時間だけでは、この割合を必ずしも決定することはできない。そのために耐えしのんだ辛さや、そのために用いられた創意のさまざまな度合も、同じく計算に入れなければなるまい。1時間の辛い作業のほうが、2時間のやさしい仕事にくらべて、いっそう多くの労働がいるかもしれない。また、習得するのに10年の労働がかかる職業に1時間はげむほうが、通常のわかりきった業務で1ヶ月働くよりもいっそう多くの労働がいるかもしれない。だが、辛さにせよ、創意にせよ、その正確な尺度を見つけ出すのは容易なことではない。実際のところ、異なった種類の労働のさまざまな生産物を相互に交換するにあたっては、両方について、いくらかの斟酌が加えられるのが普通である。といっても、それはある正確な尺度によってではなく、正確ではなくても日常生活の業務を処理してゆくには十分なおおその同等性を目安にして、市場のかけひきや交渉によって調整されるのである。」(W.N., p. 31. 大河内訳 <I> >55ページ。) Meek [1956], pp. 75-76. 邦訳, 86ページ。

- 24) Meek [1956], pp. 75-76. 邦訳, 86—87ページ。なお、ミークは、スミスが第6章でこの問題に立ち戻っている箇所として、つぎの文章をあげている。「もしある種の労働が他の労働よりもきびしい場合には、この特別な労苦にたいして、いくらかの斟酌が当然なされるであろう。そして、一方の1時間分の労働生産物は、他方の2時間分の労働生産物と交換されることもしばしばあるだろう。」「あるいは

また、ある種の労働がなみなみならぬ技能と創意を必要とするなら、人々はそのような才能を高く評価して、そうした労働の生産物にたいして、それに用いられた時間に相当する価値以上のものを当然与えるであろう。そのような才能は、長期にわたる勤勉の結果でなければほとんど獲得できないものであって、それらの才能の産物をもつ価値は、それらの才能を獲得するのに費やされるにちがいない時間と労働とにたいする妥当な報償にはかならない場合が多い。社会の進歩した状態においては、普通以上の辛さや、すぐれた熟練にたいするこの種の斟酌が、労働の賃金についてなされるのが通例であって、おそらくごく初期未開の時代にも、これと同種のなにかが行なわれていたにちがいないのである。」(W.N., p. 47. 大河内訳<I> 80—82ページ。) Meek [1956], p. 76. 邦訳, 86—87ページ。

- 25) このことに関しては、我々がすでに取り扱ったものとしては、たとえば、1920年代の諸研究についてのサーヴェイでみたP.H.ダグラスの所論「前掲拙稿『『アダム・スミスの価値尺度論』についての海外における諸研究(2)——1920年代——』, 95—96ページ, 96ページ注8。Paul H. Douglas, “Smith’s Theory of Value and Distribution”, in John Maurice Clark et al., *Adam Smith, 1776–1926: Lectures to Commemorate the Sesquicentennial of the Publication of “The Wealth of Nations”* (Chicago: University of Chicago Press, 1928; reprint ed., New York: Augustus M. Kelley Publishers, 1966) (originally in *University Journal of Business* <Chicago> Vol. 5 <No. 1, January 1927>, also in Henry William Spiegel ed., *The Development of Economic Thought: Great Economists in Perspective* <New York: John Wiley & Sons; London: Chapman & Hall, 1952>, pp. 81–88. 越村信三郎訳「スミス論」(スピーゲル編, 越村信三郎, 長洲一二監訳『古典学派 経済思想発展史Ⅱ』, 東洋経済新報社, 1954年) 8—16ページ。)を、参照せよ。

- 26) Meek [1956], p. 76. 邦訳, 87ページ。なお、ミークによれば、スミスは理論的調整がなされるべきやり方について詳しく述べてはいないが、もしスミスがこのことをさらに手を加える必要のあるほどに重要なものと考えていたならば彼がたどったかもしれない道すじを、彼はいくつか示している(少なくとも熟練労働の不熟練労働への還元については)、とされる。そしてミークは、熟練労働の不熟練労働への理論的な還元という理論的調整においてスミスがたどったであろう道すじをつぎのようなものとして示している。それによれば、スミスはおそらく、大多数の場合において熟練の違いはほとんどまったく教育と習練によるのだということを強調したであろう、すなわちスミスは、たいいてい才能と熟練は生まれつきのものというよりもむしろ獲得されたものだ、と信じていたのである、そしてもしそうであるとすれば、すぐれた熟練が生得の能力にもとづくという比較めなケースは捨象されえたであろう、そして、熟練労働と不熟練労働との調整は、たんに習練の労働

費用を考慮することによってなされえたであろう、とされる。(そして、ミークによれば、本稿注24でみた文章においてスミスが、まさった才能をもつ人々の生産物の価値の優越は「それらの才能を獲得するのに費やされるにちがいない時間と労働とにたいする妥当な報償にほかならない場合が多い」というときには、彼はいまいったこのことを考えているように思える、とされる。) Meek [1956], pp. 76-77. 邦訳, 87-88ページ。

なお、ミークは、スミスは熟練労働の不熟練労働への還元という問題にヨリ関心をもっていたとするのであるが、強度のまさった労働の強度の劣った労働への還元の問題に関してミークはつぎのような指摘をなしている。それによれば、強度のまさった労働の強度の劣った労働への還元は、熟練労働の不熟練労働への還元と同じ程度のむずかしさを示さない。というのは、ひとつには、一国のなかのさまざまな産業における労働の平均強度の違いは、平均熟練度の違いほどには大きくはなさそうであるからであり、また、そのような違いが存在する場合には、『国富論』第1篇第10章での賃金格差についての所論においてスミスが考察したいいくつかの事情によって、それらの違いはある程度つぐなわれそうであるからである。それでもなお残存する強度の違いは、おそらく、平均的労働者を彼自身の産業から他の産業へ移しそしてそこで彼の平常の強度をもって働くよう指示することによって(もしこの程度の工夫が必要と思われたならば)、取り扱われえたかもしれない。そのときには、強度のまさった労働の強度の劣った労働への還元は、相対的な物理的生産性のたんなる比較を基礎として行なわれえたであろう。なお、我々が、異なる国々における強度の通常の程度における違いを考察するときには、この問題は、明らかにもっと重要である。Meek [1965], pp. 76-77 n. 3. 邦訳, 88ページ注1。

- 27) その間の事情については、以上本稿でみてきたミークの所説に加えて、Meek [1956], pp. 69-74, 77-78, 邦訳, 78-85ページ, 89ページを見よ。

なお、ミークは、この「費用説」(“cost theory”)という言葉を生産者が当該商品の生産をつづけるかがあるためには償われなければならない「費用」(利潤を含む)といった角度から商品の価格の問題を取り扱うすべての理論を含むものとして、使用する、としている。そしてまたミークによれば、そのような「費用説」には、均衡価格は生産費によって決定されるということを言っているにすぎない「費用説」もあれば、それよりすすんで、生産費自体の究極的決定要素を追求している「費用説」もある、とされる。Meek [1956], p. 77 n. 3. 邦訳, 89ページ注1。

- 28) Meek [1956], pp. 77-78. 邦訳, 89ページ。

- 29) Meek [1956], p. 78. 邦訳, 89-90ページ。ただしミークによれば、もしマルクスがスミスの(およびリカードウの)著作を利用できずそして彼らの誤謬から学ぶことができなかったならば、マルクスはこの別の方法に到達しえなかったかもしれない、とされる。Meek [1956], p. 78. 邦訳, 90ページ。

30) David Ricardo, *On the Principles of Political Economy and Taxation (The Works and Correspondence of David Ricardo, edited by Piero Sraffa, Vol 1, <Cambridge: Cambridge University Press, 1951>)*, p. 15. 堀 経夫訳『経済学および課税の原理』(P.スラッファ編『デイヴィッド・リカード全集』第1巻,雄松堂書店,1972年),17ページ。

31) Meek [1956], p. 78. 邦訳, 90ページ。

32) Ricardo, *Principles*, p. 23n. 邦訳, 26ページ注2。

33) Meek [1956], pp. 78-79. 邦訳, 90-91ページ。ただし, ミークは, スミスが「支配しうる労働」を価値の「真の尺度」としたがゆえに彼の議論は以上のような欠陥をもつこととなったとするのであるが, 他方で, それでも少なくともスミスは, 尺度の不変性の必要性を認識し, また, 熟練労働の不熟練労働への還元という問題を提出した(また部分的には解決した)という名誉を与えられるべきである, という価値論史上の評価を与えている。Meek [1956], p. 81. 邦訳, 93ページ。

なおこのような指摘に加えて, ミークは, 全体としてのスミスの価値論の価値論史における位置ということに関連して, 大旨つぎのような見方を示している, といえる。それによれば, スミスの歴史的使命は, マルクスが十分に察知していたように, 第一に, 「ブルジョア社会の内部構造に入り込む」ことを企てること, 第二に, 「ブルジョア社会のこの内部構造が外に現われるその実際の形態を描き, 外的に現われるとるようにその諸関係を示し, また一部には, さらにこれらの現象にたいして学名命名法とそれらに対応する抽象的観念とを見つけた」という, 二重のものであったのであるが(K.マルクス著, 前掲訳書, 211ページ。), スミスの時代において本質的に新しいものであったこの仕事は新しい道具を必要としたのであり, そしてこれらの新しい道具のうちもっとも重要なものの一つで, そのとき発展しつつあった社会経済的諸関係の分析を助けるためにきわめて意識的に展開されたものが, 『国富論』第1篇に提示された価値論であった。そしてスミスは正確にかつ論理的に, 価値現象を, つぎの事実, すなわち, 分業によって特徴づけられるすべての近代社会においては諸個人はある種の市場で彼らの労働の生産物を相互に交換する独立の商品生産者としての資格において互いに関係づけられるのだという事実, と結びつけることから始めた。ここからスミスは, 価値の「真の尺度」の探求へと進んだ。(不幸にも, 彼が選んだ尺度は, それが遂行することを要求された任務に適してはいなかった。)さらにつぎの段階として, 商品を生産するのに用いられた労働の量がその商品の価値(「真の尺度」で評価された)を規制するのにいくらかでも役立つとすればそれはどの程度であるかと, スミスはみずから尋ねた。この問題にたいしてスミスは一方で, 体化された労働の量が直接的に, 前資本主義社会における商品の価値を規制し, また, 体化された労働の量の変化は, あらゆる形態の社会において, 商品の価値の変化を引き起こすであろうとしたのであるが,

「支配しうる労働」を価値の「真の尺度」とするスミスは、「資本の蓄積と土地の占有の行なわれる」近代においては、支配しうる労働の量は必然的に体化された労働の量よりも大きいということから、価値は、もはや後者によって規制されることなく（ただし、ミークは、『国富論』のある箇所—— W.N., pp. 312-313. 大河内訳< I >513ページ——では、体化された労働の比率が、近代における「金銀の価値と他のあらゆる種類の財貨の価値とのあいだの割合」を支配するものとしてはっきり描かれている、ということを指摘している。Meek [1956], p. 81 n. 1. 邦訳, 94ページ注1。), むしろ、商品の「自然」価格を構成する賃金、利潤および地代によって、規制されるのだ、とすることによって、この問題に十分に答えることができなかった。（スミスは、生産の領域で人々が相互に結ぶ基本的諸関係が交換の領域において彼らが入る諸関係を究極的に決定するという考えの表現をその本質とする労働価値説を、十全に展開することができなかった。）だが、スミスはこの問題をこのように尋ねた最初の人であったように思われるのであり、そして、彼がそれを尋ねたという事実は、彼がそれに十分に答えられなかったという事実よりも、はるかに重要なのである。事実、労働価値説は、スミスから大きな貢献を受けているのであって、それゆえ、彼がそれを「拒否」したのだと主張することは、労働価値説の誤解であるだけでなくスミスの重要な貢献を過少評価するものであり、少なくとも重大な限定がつかないかぎり、そのようなことをほめかすことは、ばかげているほどなのである。Meek [1956], pp. 45, 79-81. 邦訳, 46ページ, 91—94ページ。

結 び に 代 え て

以上、J.F.ベル、J.A.シュムペーター、J.P.ヘンダーソン、R.L. ミークの「アダム・スミスの価値尺度論」に関する諸所論をみてきた。

以下では、それらの所論の特徴等に関して、若干の点を示しておくこととする。

まず、ベルは、スミスの問題とする価値尺度とは、他財貨にたいする購買力としての交換価値の尺度のことであり、そしてその尺度は、労働、しかも「支配される労働量」であった、とするのであった。ただし、ベルの所論においては、スミスの議論における「労働量による価値の測定」は「労働量の比率による価値の規制」といわば同一視され、それらは「労働

のタームでの価値の説明」として一括され、そして、そのような説明の妥当性は「初期未開の社会状態」のみに限定されているとされるのであった。

つぎに、シュムペーターの所論の大きな特徴は、スミスの議論における交換価値の尺度の問題はワルラス流のニューメレールの問題である、ととらえているということである。すなわち、シュムペーターによれば、スミスは貨幣のタームで表現されている価格よりもヨリ信頼のできる交換価値の尺度を発見することを試みたのであるが、当時すでに発明されていた指数方法を知らなかったスミスにとってこの問題は結局のところ貨幣に代わるニューメレールを選び出す問題であったのであり、そしてスミスはニューメレールとしての穀物を検討したのち、最終的には、ニューメレールとして、貨幣、金、銀の代わりに、労働（「支配労働量」）を選び出した、とされるのであった。なお、シュムペーターによれば、このこと自体にはなんら論理上の問題はないのであるが、スミスはあるものをニューメレールに選ぶことが意味することと意味しないことについて明確ではなかったのであり、ニューメレールとして労働を選ぶという基本的には簡単なこの考えを伝えるにさいしてそれがさらに深い意味をもつかのような議論を展開したため、スミスは「価値規制」の問題を取り扱うものとしての労働価値説を主張したのだという誤解を生むこととなった、だが事実是这样ではなかったのであり、それはあたかも雄牛をニューメレールに選ぶことが雄牛価値説を主張しているわけではないのと同様である、とされるのであった。

他方、ヘンダースンによれば、スミスは真実の交換価値の真の尺度は効用よりもむしろ労働であるとしたが、それは、スミスはもともと微視的世界よりもむしろ巨視的世界に関心をいだいていたからだ、とされるのであった。そしてまたヘンダースンは、穀物と貨幣のどちらが財貨の真実価値（真実の交換価値）のヨリ良い尺度であるかということについてのスミスの議論も、巨視的な分析の一環をなすものであってそれはリアル・タームでの国民総生産の評価における指数問題にかかわるものである、とみるのであった。

最後に、ミークは、価値尺度に関するスミスの議論についてより詳細な検討をくわえたのであるが、それによれば、『グラスゴー大学講義』での価値尺度としての労働という考えは、富裕は貨幣に存するという重商主義的見解に対する批判の武器以上のものではなかったのになら、『国富論』では、スミスは、彼の「支配される労働量」という交換価値の尺度は貨幣のペールを貫いて交換の外的現象の奥に横たわる一定の基本的社会関係にまで到達するという意味で真の価値尺度なのだと考えていた、とされるのであった。また、ミークは、『国富論』でのスミスの価値論自体における「交換価値の尺度の問題」と「交換価値の規制の問題」との間の関係を指摘するとともに、スミスが「支配労働」尺度を真の尺度として採択したのは、資本主義のもとでの蓄積という特殊な問題についての分析への彼の関心の産物であるという点がかかなり多い、ということ、だがスミスはこの概念を一般化して一般的な形で示そうとしているということを、指摘したのであった。さらにまたミークは、「異質労働の問題」に関連して、スミスがこの問題を論じた時点では労働の質的差異という問題は労働の熟練および強度の差異の問題として現われることとなっていたということ、そしてこの問題についてのスミスの議論はいくつかの点で不十分なものであったけれども、スミスは熟練労働の不熟練労働へあるいは強度のまさった労働の強度の劣った労働への理論的な還元が市場において当該の労働者たちが実際に受け取る報酬を考慮して行なわれるべきだということを示唆しているのではないという意味で、この問題についての全体としてのスミスの議論にたいしては、実際には、循環論という非難はあたらない、ということを指摘したのであった。そしてまたミークによれば、スミスが「真の尺度」として「支配労働」尺度を選んだことがスミスの提出した価値論の諸欠陥の起源となり、その尺度はそれが遂行することを要求された任務に適したものではなかったのであるが、少なくとも、スミスは、尺度の不変性の必要性を認識した熟練労働の不熟練労働への還元という問題を提出した（また部分的には解決した）という名誉を与えられるべきである、と

されるのであった。